

# グローバル化下のエネルギー市場変貌について

田 代 安 彦

## 1. 問題の設定

グローバル化の下で、国際化と情報化そしてTPPなどの貿易自由化がすすむと、国内市場は、国際市場や市況と無縁でいられなくなる。そこで、市場連動価格の普及と対応に関する視角から、国際市況の特徴を明らかにし、それら変化の持つ意味と備えるべき対応について研究する方針である。

この研究の独自性として、石油と液化天然ガスはもっとも最初のグローバルなエネルギー市場商品であるが、それゆえに、古典的な価格形成理論や古典的な貿易理論だけでは不十分な点が出てきたと言わざるを得ない。報告者は、長年にわたって、石油と液化天然ガスの採掘から石油・液化天然ガス油田科・石油・液化天然ガス商品のコンビナートによる製造および市場販売と市場価格の形成、そしてエネルギー小国である日本のために輸入に携わってきた貴重な経験から理論構築を試みてきた。

その経験は、英国の北海油田から中東油田、すなわちクウェート、UAE（アラブ首長国連邦）、イランに及び、湾岸戦争時にはイラク軍の人質体験も強いられた。この過酷な経験は、25年以上たって現在のISISによる中東油田地域の破壊という状況を経験にもとづきながらも精緻に分析することが期待され、新しい理論構築の試みが、唯一無二の独自性をもつと保証されうると思料される。

このような観点から、研究報告者は以下の研究成果を上げた。

## 2. 研究成果

### (1) リカードの比較優位説の崩壊と自由貿易の新しい理論構築

グローバル化の下で、貿易自由化が進むと、貿易理論を250年近く支配してきたリカードの比較優位

説が、市場連動価格の登場と需要の多様化により崩壊したことが明確になってきた。市場連動価格に備えた様々な交渉術ノウハウに関する実務的な対応を研究し、時間軸を持つ3次元とトレードフローの多角的組合せによる4次元交渉術を体系的に整理して、新しい理論構築を図り、「4次元交渉術」に基づいた自由貿易の新しい目的と対応を明確にした。このことは、石油やガスの取引だけではなく、あらゆる国際市況商品の取引に応用が出来る。

### (2) 第四次石油危機に対する備え

#### ① イランの動向

大産油国でありながら<sup>1</sup>、核開発に絡み欧米諸国の経済制裁を受けていたイランが核開発凍結に転じたことは中東地域と欧米諸国の中東政策の大転換であった。第一に欧米諸国のイランに対する経済制裁緩和が開始された。米国の宿敵であったイランもマネーロンダリング・リストへの着実な対応が評価されれば、米国とのあいだに新たな動きがありうる国際情勢となったのである。米国とイランとの新たな動きは、日本とイランとの相互ビジネスチャンスが到来したことを意味している。(但し米国新政権次第で状況は変わりうるが…)研究報告者は、今後の動向を見極めるべくイランを訪問現地視察した。

#### ② エネルギー需要の爆発的増加と市場連動価格が中国に及ぼした産業構造変化

グローバルな経済拡大によって爆発的なエネルギー需要が今後見込まれるなか、中国のエネルギー消費が劇的に増大している。爆発的なエネルギー需要に応じて、IT化を含め中国の産業構造は進化していると仮定される。中国の産業構造の進化は、どのような実態になっているのか、ここにグローバル経済の将来を占う姿が秘められているはずである。そこで、その中国の産業構造の変化をIT分野も含めて探るべく、最初に、中国最大の都市上海の動向を現地視察した。

<sup>1</sup> イランの石油確認埋蔵量は、中東ではサウジアラビアに次ぐ第2位で、1,584億バレル（全世界の9.3%）、天然ガスの確認埋蔵量は、33.5兆CM（全世界の18.0%）で世界第1位である。出所：BP統計2017

### ③ テロ活動の石油・液化天然ガス市場への影響

中東のISIS<sup>2</sup>中心としたテロ活動は、グローバルな経済活動にも大きな影響を与えている。そのテロ活動は、中東地域にとどまることを知らず、残念なことに、中東から、アジアまでの安全保障を揺るがしかねない状態にまできてしまった。ISISのテロ活動は、直接的にも間接的にも、世界のエネルギーの安全保障にも係わって来る問題である。これは冷戦終結後の米ソ対立が終了した当時予想もしなかった事態であった。研究報告者は、グローバルなエネルギー供給を脅かす、テロ関連の動向を定期的に把握すべくフォローを研究期間中に開始した。また、港湾都市という性格を強くもつ福岡市という土地柄、その福岡市に立地する福岡大学のミッションとして、地域社会（福岡市）との連携を深めるべく、中東のテロ情報について、県警察署への情報分析提供と定期面談を実施した。研究業績は、以下の論文と報告書で提出した。今後北朝鮮の核開発問題とアジアの安全保障、中東へ波及懸、イランとサウジアラビア、カタール

の関係、イスラエルに石油を供給しているイラクのクルド族の独立問題などを再増加し始めた世界のエネルギー、石油需要問題への対応を考える研究課題として、取り上げる予定である。

### 研究業績

田代安彦「4次元交渉術と日本の未来」『商学論叢』（福岡大学）平成28年6月、第61巻、第1号

田代安彦「イラン・テヘラン視察レポート」2016年10月1日、日本貿易学会西部支部報告資料

田代安彦「上海市視察レポート」2016年3月9日～16日、研究推進部紀要掲載予定

田代安彦「中東テロ情勢」2016年3月16日、研究推進部紀要掲載予定

---

<sup>2</sup> 「ISISはアブー・バクル・アル＝バグダーディー指揮の下イスラム国家樹立運動を行うアルカイダ系（現在は絶縁状態）イスラム過激派組織である。イラクとシリア両国の国境付近を中心とし両国の相当部分を武力制圧し、国家樹立を宣言し、ラッカを首都と宣言している。外交関係の相手として国家の承認を行った国家は無い。欧米諸国を中心とした有志国による激しい空爆にも関わらず、勢力の拡大を続け、2015年5月までにシリア領の過半を制圧、ISISによる統治地域の面積は、2015年6月現在、日本の国土面積より一回り小さい程度である約30万平方キロメートルにも上ったが、IHSジェーンズ（ジェーンズ・インフォメーション・グループ）によると、同年12月14日には、1月時点より支配地を約14パーセント縮小し、支配面積は北海道とほぼ同じ約7万8000平方キロメートルになるなど、勢いにかげりも見えてきている。」引用元：Wikipedia 執筆者追記／ISISはアルカイダ系イスラム過激派組織としているが実際には、サダムフセイン政権崩壊後イラクで米軍監視下にあった収容所キャンプ ブッカで構築された人脈による過激派組織で、スンニ派宗教学者バグダディのもとに、旧サダムフセイン政権下の軍人などがメンバーとなっている。アルカイダは、アブドラ・アザム・ユースフ（ムジャヒディン指導者、1966年エジプト ナセル大統領に処刑された）に師事したウサマ ビンラーディン（2011年パキスタンで死亡）、副司令官アブ ムサブ ザルカウウィー（2006年死亡）がいなくなり、エジプト人医師であるアイマン ザワヒリーが指導者となってジハードを唱えており、アルカイダ系とは区別して把握すべきと考えられる。